

季刊・オーディオ アクセサリー

Audio Accessory

2025 SPRING 196

特別付録 CD

山本 剛 トリオ

最新

公開ライブより

一部収録



柔らかくて音がいい
スピーカーケーブル
新世代モデル比較

特集

ハイレゾ・ストリーミング元年

Qobuzを楽しむための システムプラン

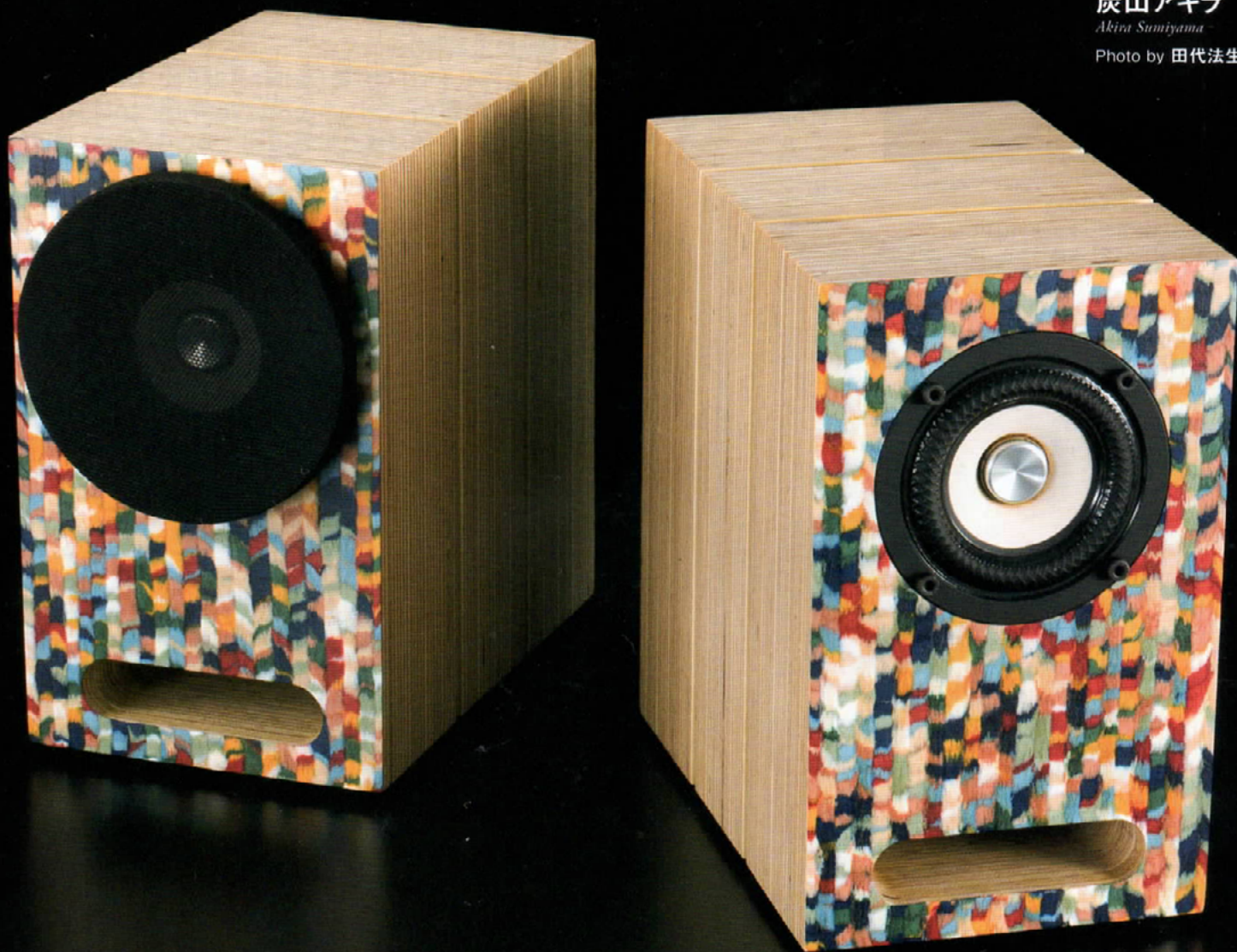
サイズを超越する音質を備えた コンパクト・フルレンジの魅力

2008年にイタリアのシチリア島で設立されたAudel社。創設者でデザイナーのWalter Carzan氏のスピーカー作りにおけるテーマは音楽とデザインの融合。パーチの積層材を使用したキャビネットが大きな特徴で芸術性の高い独創的なスピーカーを手掛けている。本機はラインアップ中で最小サイズのフルレンジ・スピーカーの第2世代モデル。このサイズからは想像できないようなサウンドを炭山アキラ氏が体験している。

Text by
炭山アキラ

Akira Sumiyama

Photo by 田代法生



Audel

Audel U-Nika

スピーカーシステム

¥242,000 (ペア / 税込)

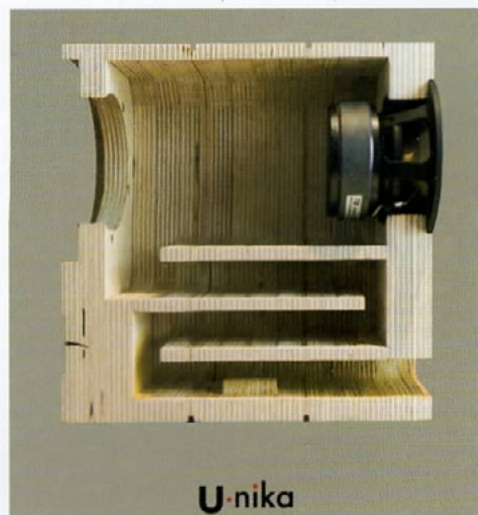
※写真はモザイク(アート)仕上げモデル

Specifications

●形式:フルレンジ・ラビュリントス・スピーカー ●キャビネット:マルチパネル・システム ●ドライバー:8cmフルレンジ(バンパー・ファイバー・コーン+サントプレーン) ●再生周波数:60Hz~20,000Hz ●感度:87dB ●インピーダンス:8Ω ●推奨アンプ出力:10W~75W ●サイズ:132W×220H×220Dmm ●質量:4.5kg ●取り扱い:(株)ステラ

巧みなパーチ積層を採用し
迷路のようなダクトを採用

伊Audelのスピーカーは数年前に少しかだけ音を聴いたことがあるが、本作は8cmフルレンジを用いたNikaをブラッシュアップしたU・Nikaである。ユニットは竹の繊維が配合されたバルブコーンのフルレンジで、ポールピースが突き出したような変わったデザインのデフューザーを持つ。エッジはダイヤのような模様のものだが、これはロールエッジとタンジェンシャルエッジの美点を両立することを目指したもので



U-nika
スピーカ内部にはリブ加工を施した特許技術IRS (Internal Rib System)を採用。異なる形状に加工したバチ積層材を貼り合わせることでリブ構造を形成。バスレフダクトも同時に切削されている。キャビネット中央部には次世代アクリル素材FENIXを挿入。早い振動減衰特性を狙っている



ノッチフィルター(特定の周波数を減衰するエンクロージャー構造)と竹素材の強靱なコーンを採用したフルレンジユニットを搭載。モザイク(アート)は背面にも施されている



U-nika
仕上りはウォールナット、トライバル、モザイク(アート)から選択できる

あろう。指先でコーンを弾いてみると、パリッと乾いた質感で威勢の良い音がする。

キャビネットはバチ合板をくり抜いたものを積層して製作されている。自作派も一度はやってみたいと考えるが、日曜大工ではなかなか実現できない、工数がかかり、精度が要求される作りである。中間部に2層の黒っぽい板が挟まっているが、これはアクリルを展示させたFENIXと呼ばれる素材で、極めて高い減衰特性を持つという。バスレフ型のように見えるが、このダクトは内部で2回折り重ねられ、一種の音響迷路として働いているという。バスレフと似ているが少し動作原理が違い、大がかりになるがより低域を稼ぎやすい方式である。こういう作りだけに、全部の面が叩いてもまったく鳴かない。極めつけに頑丈な

キャビである。底板には硬質の粘弾性材と思しき脚が、3点支持で装着されている。

バッフルの仕上げはウォールナットの突き板とモザイク、ジグザグ、トライバルという芸術的な仕上げも選ぶことができる。試聴機はモザイク仕上げだったが、じっくり近距離で観察すると、ランダムに染めた細い帯状の突き板をすき間なく張ってあるように見える。積層キャビネットもそうだが、何とも手のかかることを何事もないかのように行うメーカーだなど、驚愕のほかない。

美的で芸術的な寛ぎの世界とオーディオ的解像度を併せ持つ

取材は本誌試聴室で行った。小口径フルレンジだけに、あまりドラムスがガンガン入るソフトなどを避けつつ音を聴いていく。クラシックはおとなしめの吹奏楽を聴いたが、広い試聴室に音が存分に行き渡るくらい音量を稼ぐことができ、グッと奥へ定位したトゥッティとスピーカーのやや後ろくらいに定位するソリストの対比が実に鮮やかで、相当のスケール感も表現する。全体的にはコンサートホールの2階席最前列で聴くような音場の深みと鮮明さが味わえた。小編成の弦楽に2声が入るソフトも聴いてみたが、歌手は伸びのびと歌い、弦の涼やかで伸びやかな艶がまたまたまなく魅力的だ。天井の高い場所まで収録したソフトだろう、エコーが上へ抜けていくのが分かる。こういうソフトを最も得意としているスピーカーではないか。「こんな音なら1日中でも聴いていたいな」と思わせる、美的で芸術的な寛ぎの世界とオーディオ的解像度を併せ持つ、器の

大きな小型スピーカーである。ジャズも割合静かな曲を選んでかけてみたが、ソロ・トランペットの囁くようなかすれた質感を巧みに表現するかと思えば、一閃の刃を破綻させることなく、まろやかかつ輝かしく描き出す。ギターはホロウボディの響きに哀愁味を感じさせ、ピアノは明るくよく弾む。ウッドベースの帯域もかなりのとこまでしっかりと再現するのだから、音響迷路は上手く働いていると見てよいだろう。

ポップスは最低域のみ少々軽くなるが、重層的な音場の広がりや薄紙一枚ずつ剥がしていくような精密描写を聴かせるのにたまげた。高級なマルチウェイ・スピーカーに比べるとさすがにボーカルは若干サ行がキツイが、それとてもあっていえるという範囲である。この口径だけに、音量が稼げなくてニアフィールド・リスニングとすることを半ば覚悟していたのだが、結構満足の行く音量でバスドラムのバースをそれらしくさせるのだから、このスピーカーは本当に大したものだと感じ入った。

クロスオーバー・ネットワーク素子を追放できるというフルレンジ・スピーカーの利点を最大限に生かしたフレッシュで瑞々しい音と、バチ積層で鳴きがなく音響迷路でユニットの器を超える低域の再現を可能にしたこのスピーカーは、私のような日曜スピーカー工作者が同じことを考えても、まずどこかに破綻をきたすのが関の山だ。それをここまでレベルへ高めることができる、Audelの創業者Walter Carzan氏の技術と情熱に感服を禁じ得ない試聴となった。広く薦めたいかなるスピーカーである。